

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：13801

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13048

研究課題名(和文)1930年代生まれの日本の芸術家たちの交流と葛藤に関する領域横断的研究

研究課題名(英文)Cross-Disciplinary Study on the Exchange and Conflict of Japanese Artists Born in the 1930s

研究代表者

堀江 秀史(HORIE, Hidefumi)

静岡大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：10827504

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文):本研究が目指すのは、半世紀前の日本における芸術状況の正確な把握である。助成期間四年間で、基礎となる寺山研究を、学術向けあるいは一般向けに適切な形にして社会に還元することができた。寺山修司を主とする二冊の研究書、『寺山修司の一九六〇年代 不可分の精神』(白水社、2020年2月、全554頁)ならびに、『寺山修司の写真』(青土社、2020年11月、全336頁)である。これらにより、本研究の基盤を固めることが出来た。また、当初掲げた、広い読者に向けた(例えば新書のかたちでの)研究成果の提示にまでは至らなかったものの、その調査の大半を終え、実現間近の次の課題として設定するに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、戦後日本の芸術家たちの作品を再検証してその活動の内実を明るみにし、戦後日本芸術史を描き直すことである。また、それらの形成過程と、時を経て導きうる意味を考え、日本文化に新たな知見をもたらしたい。

社会に対しては、1960年代という、高度経済成長期を迎え、国内初のオリンピック開催等、活気とともに歪みを生みもした時代の日本を再検証する本研究は、これからの検証を控える二度目の東京オリンピックを終えた現在を相対化し、不穏な空気の拡がる国際情勢や、地球規模の環境変動で世界に蔓延する不安感のなかに一当事者として存在する日本の今後を導く知見のひとつとなることを目指した。

研究成果の概要(英文):The aim of this research is to grasp the "magnetic field" of art in Japan half a century ago. During this four years of the grant period, I was able to publish two books in a form suitable for academics and the general public: Terayama Shuji's Indivisible Spirit in the 1960s (Hakusuisha, February 2020, 554 pages in total) and Photographs of Terayama Shuji (Seidosha, November 2020, 336 pages in total). By these, I was able to solidify the foundation of this research. In addition, although I was not able to present a readable book for a wide range of readers, I have completed most of the preparation and have set it as my next task, which is about to be realized.

研究分野：近現代日本文学

キーワード：寺山修司 比較芸術論 クロスジャンル

1. 研究開始当初の背景

1960年代は、東京オリンピックの開催、テレビの普及、学生運動など、日本社会に大きな影響を及ぼした出来事とともにひとびとの記憶に刻まれてきた。そこから50年以上を経た現在、展覧会の開催や学術対象としてこの時代の文化を扱う書籍など、改めてこの時代を研究対象として検証しようとする機運が高まっている。このような動きの背景には、同時代の芸術家たちの高齢化を踏まえて、残すべき記憶は直接に伺って定着させねばならないという事情はもちろん、時間をおくことで情報が徐々に出揃うとともに、次世代による距離感をもった検討が可能になってきたことが挙げられるだろう。

本研究が対象としたい芸術家たちの活動について、その研究は2010年代に入って本格化している。「日本写真の1968」展(東京都写真美術館、2013年)「1968年 激動の時代の芸術」展(千葉市美術館、2018年)や、『1968』(全三巻、四方田犬彦ら編、全て2018年公刊)など、パリで五月革命が起こり、日本では東大入試の中止その他、政治と芸術が肉薄した「1968年」を核に据えてこの時代を問い直そうとする展覧会の開催や関連書籍の出版は、2010年代に入って国内で活発化している。あるいは、映像の意味そのものを問い直そうとした中平卓馬や多木浩二によるPROVOKEの活動は、『Provoke: Photography in Japan between Protest and Performance, 1960-1975』展としてヨーロッパ各国(オーストリア、スイス、フランス)とアメリカ(シカゴ)を巡回し(2016-17年)、世界から熱い視線を注がれてもいる。

上記のような研究状況を踏まえて本研究は、

- 1、時代を「1960年代」で区切らずに、生まれ年で考えること(換言すれば、1960年代に「若手」として台頭した人々を対象とすること)
 - 2、時代精神を、芸術全般を広く見渡して、総合的な展望のもとに捉え直そうとすること。
- 以上の二点を軸に置いた。

2. 研究の目的

上記背景のもと、本研究の目的は、「なぜ1930年代生まれの芸術家たちは、かように多様で21世紀前半の現在からみても「前衛的な」成果を残せたのか」というものに集約される。これに答えるためにまずは、未だ研究の途上にある彼/彼女らの活動の内実を整理して把握し、何が重要かを抽出する必要がある。

「1930年代生まれの日本の芸術家」というコーパスの設定は、太平洋戦争とその終結という限りなく大きな時代的画期を10代までに経験した世代の研究を行なうということの意味する。当時の雑誌資料や作品を精査してその活動の実態を実証的に整理し直すことで、最終的には、1930年代生まれの芸術家たちの豊饒性の理由へと迫りたい。

さらに付言するならば、本研究では、ポスト60年代の動きまで視野に収めるために、敢えて「1960年代」ではなく、「1930年代生まれ」というコーパスを設定している。この射程により、60年代以降の彼/彼女らの活動を追うことも可能となり、従来の「活気溢れる1960年代」を描いて終わる時代論ではなく、その時代精神の終焉と新たな時代精神の到来(あるいは不在)までを考察したい。それによって本研究は、銃後の戦争体験からわれわれの生きる21世紀の「いま」に至るまでの日本の精神史を、芸術家の交流から明らかにし、広く社会に有益な知見を提供するものとなる。

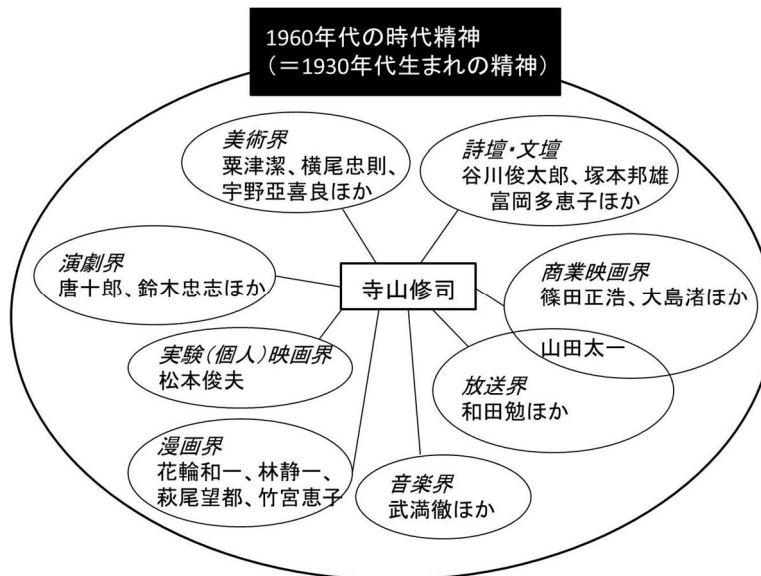
上記を問うことで目指すのは、戦後日本の芸術家たちの作品を掘り起こしてその活動の内実を明るみにし、戦後日本芸術史を描き直すことである。また、それら事実に関し各芸術家の理念を照らし合わせてその形成過程と現在だからこそ分かる意味を探り、日本文化に新たな知見をもたらしたい。高度経済成長期を迎え、国内初のオリンピック開催で活気溢れた60年代日本を再検証し、それにより、再度のオリンピックの開催がかえって分断を招いた現在を相対化し、民族的、宗教的な問題が複雑さを増し、不穏な空気の広がる国際情勢や、地球規模の環境変動で世界に蔓延する不安感のなかに一当事者として存在する現在の日本の今後を導く基盤のひとつとしたい。

3. 研究の方法

これまで蓄積されてきた時代論(1960年代論)は、「時代」という捉えどころのない対象へのアプローチとして、自らその時代を生きた著者による「わたしの」1960年代論か、あるいは自分を時代から引き離す代わりに、時代の一側面を背負うに足る強度を備えた具体的な対象が欠けた全体論と見做さざるを得ないものが散見される。

本研究では、寺山修司という多ジャンルを跨いだ芸術家の研究を通じて、芸術と社会の強い結びつきを検証した。この研究を通じて、それが寺山に限らず多くの芸術家たちが共通して抱いた意識であることも、明らかになりつつある。

本研究独自の方法は、こうして設定したコーパスに基づいて、芸術家の生きた時代とそれぞれ



作家を繋ごうとする点にある。この際、寺山修司という、芸術の専門性(ジャンル)を不問とした創作活動を行なったことで、各業界の人々との連携を導いた存在を同時代に置き直し、さらに、寺山をハブの中心として他の芸術家たちへと注目する先を伸ばすことで、共同体の時代精神に近づこうとする(左図)。同時代の芸術家たちの遺した成果が全体的な相貌を伴って整いつつある今は、それらを統合して時代を再構築できる時期だといえる。寺山という強固な軸によって研究の柱を立て、その軸との重なりや差異を対照して比べることで、他の芸術家たちの独自性も浮き

彫りとなり、それらの統合の先に、時代精神が描き出させるものと期待するのである。

4. 研究成果

本研究は、助成期間三年間で完結するものではなく、段階を経て進めねばならない性格を持つ。今回の四年間(当初申請三年プラス延長一年)は、基礎となる寺山研究をより精緻な形にして、学術向けあるいは一般向けに、適切な形にして社会に還元するための研究であった。その研究は、下記の通り二冊の寺山修司を主とする研究書として結実し、本研究の基盤を固めることが出来た。また、当初掲げた、広い読者に向けた(例えば新書のかたちでの)研究成果の提示にまでは至らなかったものの、その調査の大半を終え、実現間近の次の課題として設定するに至った。

以下、主な成果である二著作とその周辺の成果を概括する。

単著『寺山修司の一九六〇年代 不可分の精神』白水社、2020年2月、全554頁

本書は、詩人寺山修司(1935-83年)の多ジャンルに亘る活動を、総体として捉えることを主眼とするものである。

第部は、総じてテーマ論と括ることができる。生涯を通じて寺山の活動の基底にあった「ダイアローグ」という行動原理及び、「私とは何か」という問いをめぐって展開された作劇や批評をまとめた。第部では、1960年代のテレビ、ラジオ、映画、雑誌といったマスメディアに注目して、寺山が60年代後半以降、多ジャンルに亘る活動を行なう基盤となる理念を磨いていく過程を追った。第部では、主に映画との関わりを検討することで、早逝した寺山への、同世代や後の世代から注がれた眼差しに迫った。終章では、南米の作家ボルヘスとの詩人的直観の共有を論じた。巻末には、独自の調査によって寺山研究史上初めてとなるラジオ年譜と再編の様子を辿れる全著作一覧を付した。

なお、本書の終盤にあたる第部第八章は、寺山修司の没後に撮られた大衆映画『少年時代』(篠田正浩監督、藤子不二雄A原作、1990)を、従来全く見逃されてきた、寺山修司との関係から読み解くものであり、そこに現れる監督の篠田正浩をはじめ、脚本の山田太一、撮影監督の鈴木達夫、キャストの大橋巨泉、主題歌の井上陽水といった現代の作家たちと寺山がいかに関係を取り結んでいるかを論証している。この論文をきっかけとして篠田正浩監督の知己を得、その警咳に直接に接しながら同時代についてお話を伺うことができた。

本書は、徹底した一次資料の検討から作家の全体像を見出そうと試みるものである。寺山は生涯変わらぬ理念を、生涯変わり続けることで貫き通した。寺山の基底には、近代社会が整除して分節化した秩序とそれに付随する「常識」を覆そうとする「不可分の精神」が在ることを論証した。

本書に寄せられた外部評価(書評など)は、2020年4月18日付『朝日新聞』「著者に会いたい」欄、同27日付『東奥日報』書評欄(評者=久慈きみ代)、『週刊読書人』5月15日号書評欄(評者=松井茂)、宇波彰現代哲学研究所ブログ

<http://uicp.blog123.fc2.com/blog-entry-349.html#more> (評者=野島直子)が挙げられる。

また本書は、第26回日本比較文学学会賞(令和3(2021)年度)を受賞した。

単著『寺山修司の写真』青土社、2020年11月、全336頁

本書では、詩人寺山修司(1935-83年)の多岐に亘る活動のうち、演劇や文学といったジャンルに比して、これまで注目されることのなかった写真ジャンルでの活動に注目して、当該ジャンルに係る通史的な活動の詳細と、その根底にある寺山の問題意識 詩や演劇においても見られる、不断の批評意識と他人との積極的な交わりを重視する姿勢 を明らかにした。

序章にて従来の寺山写真研究において明らかになっていることをまとめたのち、第 部にて、1960 年代以降、寺山が批評家や協働者として写真家たちと関わった事実ならびに、当時の日本写真界の動向をまとめた。ここで主に注目する対象は、森山大道、中平卓馬、東松照明の三名である。60 年代の十年間を通史的に眺めるなかで、彼らとの協働の詳細と、のちに協働を解消した理由を、詩人寺山の抱いた主題と表現方法の根幹に結び付けつつ明らかにした。

第 部は、1970 年代以降、寺山修司が自ら「写真家」として、ヨーロッパや中東などで活動した経緯とともに寺山自身の写真に取り組む姿勢を追い、写真家としての寺山の達成ならびに、写真家としての寺山がこれまで注目されることが少なかった理由を明らかにした。なお、このパートにおいては、主に篠山紀信の活動を参照軸に据えて議論を展開した。

本書に寄せられた外部評価には、野島直子による宇波彰現代哲学研究所ブログ内の書評 (<http://uicp.blog123.fc2.com/blog-entry-370.html>) や、『週刊読書人』2021 年 1 月 22 日号書評欄 (評者 = 守安敏久) がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 堀江秀史	4. 巻 第510号
2. 論文標題 「著書を語る589 人文系研究書の生まれるまで（『寺山修司の写真』）」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『書標ほんのしるべ』	6. 最初と最後の頁 pp.2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀江秀史	4. 巻 -
2. 論文標題 「自著紹介 寺山修司の一九六〇年代 不可分の精神」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 UTokyo Bibliopraza「東京大学学術成果刊行助成（東京大学而立賞）に採択された著作を著者自らが語る広場」	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 堀江秀史	4. 巻 108
2. 論文標題 「博論禍」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『比較文学研究』	6. 最初と最後の頁 pp.45-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀江秀史	4. 巻 -
2. 論文標題 「『日の丸』と寺山修司の方法」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『日の丸 寺山修司40年目の挑発』映画パンフレット内解説	6. 最初と最後の頁 pp.20-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 堀江秀史	4. 発行年 2020年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 336
3. 書名 寺山修司の写真	

1. 著者名 堀江 秀史	4. 発行年 2020年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 554
3. 書名 寺山修司の一九六〇年代	

〔産業財産権〕

〔その他〕

U Tokyo BiblioPlaza 東京大学学術成果刊行助成に採択された著作を著者自らが語る広場 https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/A_00174.html UTokyo Biblio Plaza 東京大学教員の著作を著者自らが語る広場 https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/ 堀江秀史、「『偉大な質問』としての寺山修司」（寺山修司の実験映像論）、板橋グリーンカレッジ、於グリーンカレッジホール（板橋区）、2019年7月26日

6. 研究組織			
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)		備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------